

## 「ガ・ノ」交替と空代名詞について

静岡県立大学

吉村 紀子 仁科 明

### 1. はじめに一問題点

主格助詞「ガ」が属格助詞の「ノ」に交替できる格助詞交替現象（以下、「ガ・ノ交替」）について考えたい。研究史においては、この「ガ・ノ交替」は「コト」や「ノ」で導かれる名詞節（1）や関係節（2）で生ずるものとの考えが主流であった（Harada 1971、Kuno 1973、井上1976、Shibatani 1975）。

- (1) a. 太郎{が/の}結婚したことが皆にばれた。 (コト節)
- b. 息子{が/の}描いたのが入選した。 (ノ節)
- (2) a. 花子{が/の}作ったお寿司を食べた。 (関係節)
- b. 原油{が/の}安くなる可能性はない。 (関係節)

つまり、ガ・ノ交替が容認される統語構造は、(3)に示す如き、名詞句DPに埋め込まれた節CPだ、との理解である。事実、CPであっても、DP内に生じない「ト節」(4)では、交替が起こらない。

(3)[<sub>DP</sub> [<sub>CP</sub> 主語-{ガ/ノ} VP] ]

- (4) a. 誰かが[太郎{が/\*の}結婚したと]言った。
- b. 政府は[来月から物価{が/\*の}安くなると]発表した。

ところが、最近、(5 a-c)などを根拠に、ガ・ノ交替が、(3)の構造を持たない統語環境でも起こり得るのではないかという見方（Watanabe 1996、Hiraiwa 2000, 2002）が示されている。

- (5) a. 私たちは[[雨{が/の}止む]まで] 駅で待っていた。
- b. 太郎は [[花子{が/の}読んだ]より] たくさんの本を読んだ。
- c. [[中国{が/の}会議に出席する]と[しない]と] では大違いだ。

こうした議論では、「マデ」「ヨリ」「ト」の語句に上接するのはDPではなく、動詞が連体形で終わるCPであると分析する（Hiraiwa 2000: 547 (13)）。しかしながら、(5)が本当にDPを含まない構造であるとするれば、Harada (1971)の論文以来これまでの研究史の前提となってきた、ガ・ノ交替を可能にする‘構造の名詞性’（Bedell 1972, Harada 1976, Kuno 1973, 柴谷1978, Nakai 1980, Miyagawa 1993）—すなわち(3)—が否定されてしまうことになる。また、(4b)と(5c)とに差を認めないとすると、ガ・ノ交替に関する根本的理解—(1~2)と(4)との統語上の線引き—を覆すことにもなる。

そこで、本稿は、「マデ」「ヨリ」「ト」（他に「カラ」「ニ」「キリ」など）に焦点を絞り、通時的、共時的な観点からガ・ノ交替構造の名詞性について実証的に再考することとする。

### 2. 考察—格助詞

まず、(6)を見よう。問題の諸形式は、本来、体言または用言連体形を受ける格助詞であった。

- (6) a. 天地の神も助けよ草枕旅行く君が家に至るまで（羈行君之至家左右）（万葉549）

b. 遠つ人松浦佐用姫つま恋ひに領巾振りしより (比例布利之用利) 負へる山の名 (万葉871)

c. 必ずしもなさけあると、すなほなるとをば愛せず。(方丈記)

古代語では用言の連体形でまとまる句がそのまま名詞句として機能する用法—いわゆる準体句用法—を持っていた (石垣 1955)。問題の諸形式に上接する句も、準体句による名詞節として理解される。また、そのことと関わって、現代語でも「ヨリ」「ト」「ニ」は準体助詞「ノ」を伴ってあらわれることがある (7 a-c, 問題のマデについては、「ノ」は用いられないが、「時」「所」などの名詞を伴い得る)。

(7) a. 太郎は [[花子{が/の}読んだ<sub>の</sub>]より] たくさんの本を読んだ。

b. [[中国{が/の}会議に出席する<sub>の</sub>]と[しない<sub>の</sub>]と] では大違いだ。

c. [[私{が/の}思う<sub>の</sub>]に] (太郎は花子が好きにちがいない)。

(1) と同様、問題の諸形式が接続している節も名詞節として捉えられるのである。これらの名詞性は、主題の「ハ」 (名詞節内には現れにくい) が現われない事実 (8) からも確かめられよう。

(8) a. \*[[私は太郎は話を終わる]まで]待っていた。

b. \*[[花子は走る]より]早く太郎が走った。

c. \*[[君は来る]と][[太郎は来る]と]では大違いだ

以上から、問題となっている「マデ」「ヨリ」「ト」「ニ」のような語句が格助詞の性格を残していること、すなわち、これらが述部に結び付けているのが名詞節であることは明らかであろうと思われる。

### 3. 提案—空代名詞

以上の考察から、(5) のような文は、(9) に見られるような古代語の用法—すなわち、「ノ」「コト」に相当する無形の「Ø」—が現代語において残存したものとして捉えられることになる。

(9) a. [[たけきものゝふのこゝろをもなぐさむる]Ø]は哥なり。 (古今和歌集仮名序93)

b. まして五節の君は、[[綱手ひき過ぐる]Ø]も口惜しきに・・・ (源氏・須磨2-195)

そして、金水(2001)、仁科・吉村(2006)の提案に従い、現代語についてはこの「Ø」を空代名詞<sub>pro</sub>として再解釈すれば、「ガ・ノ交替は名詞性を有すCPにおいて生じる」という従来の主張(3)を問題なく維持できる。例えば(5b)は、(10)のような構造を持つと分析される。

(10) 太郎は [[花子{が/の}読んだ] <sub>pro/の</sub>]よりたくさんの本を読んだ。

問題の諸形式の構造は、それらの形式の歴史的な変化と矛盾なく捉えられるのである。

統語分析では共時的分析が優先される。とはいえ、歴史的な連続性を掬い取れない分析は、やはり不十分であろう。本発表は「ガ・ノ交替」を素材に、通時的变化への理解と矛盾しない統語分析を試みた。

### 参考文献

Harada, S.-I. 1971. Ga-No conversion and idiolectal variations in Japanese. 『言語研究』60. 25-38.

Hiraiwa, K. 2002. Nominative-genitive conversion revisited. Akatsuka, N. and S. Strauss (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*. Vol. 10. 545-558.

石垣謙二. 1955. 『助詞の歴史的研究』岩波書店.

- 金水敏. 2001. 「助詞から見た日本語文法の歴史」 文法学研究会第3回 集中講義資料.
- Miyagawa, S. 1993. LF case-checking and minimal link condition. *MIT Working Paper in Linguistics*. Vol. 19. 213-254.
- Nakai, S. 1980. A reconstruction of Ga-no conversion in Japanese. *Papers in Linguistics* 13. 279-320.
- 仁科明・吉村紀子. 2006. 「補文標識の出現—「の」の歴史的変化」 『国際関係・比較文化研究』 第3巻  
第2号. 75-89.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析—生成文法の方法』 大修館.